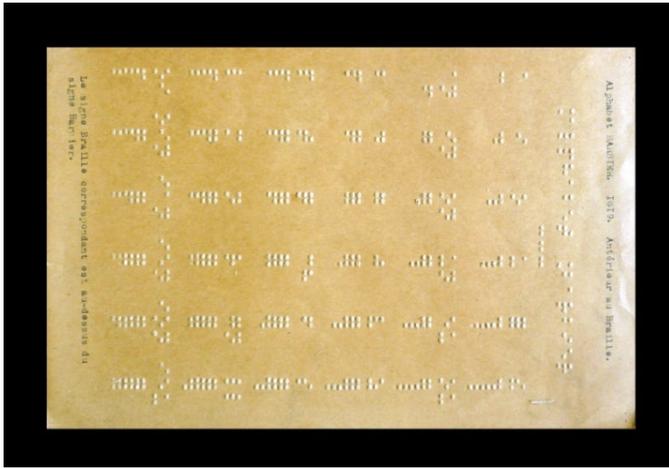


24. バルビエの12点点字



バルビエの点字は種類が多く、11点点字（夜間文字）・3点点字（野戦病院文字）等があり、最後に縦6点2行の12点点字に到達し、1822年に発表した。この写真は中村京太郎氏が西欧訪問の折り、パリのヴァランタン・アウィー協会点字図書館で懇請、ようやく入手して持ち帰ったもの。

＜筑波大学附属視覚特別支援学校蔵＞

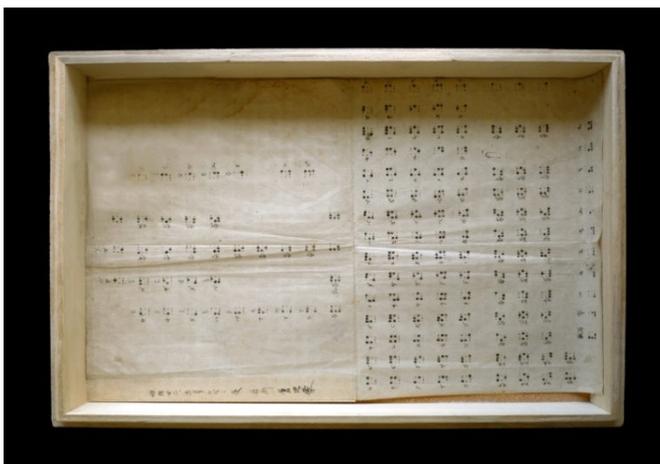
25. バルビエの12点点字をさわる本校生



24のバルビエの12点点字は現在でも筑波大学附属視覚特別支援学校に保存されている。平成20年8月に同校へ点字の歴史についての学習に訪れた際、さわらせていただいた。

＜筑波大学附属視覚特別支援学校蔵＞

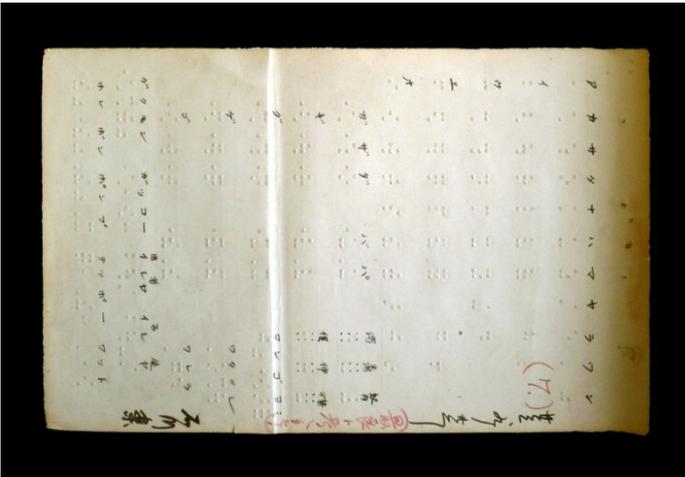
26. 石川倉次（くらじ）の8点



石川倉次（1859～1944）は静岡県出身で、明治19年より訓盲啞院の教員となり同23年に日本訓盲点字を完成した。ブライユの6点点字では50音に対応できる見込みはないと考え、1辺を3点で表した四辺（四方）の8点（中心の点は使用しない）をまず考案した。明治22年11月14日のこと。同年10月31日の「石川倉次日記」には「此夜点字ヲ考フ マヅヨシと思フモノヲ得タリ 十二時半寝ヌ」とある。

＜筑波大学附属視覚特別支援学校蔵＞

27. 石川倉次考案6点点字 最良のもの



日本での点字を考案した人として石川倉次の名が有名である。しかし、彼だけが6点点字を完成させたのではない。遠山邦太郎や伊藤文吉・室井孫四郎など多くの人がより良い点字の完成に苦心した。明治22・23年頃には点字が活発に翻案され、点字研究会には遠山案・石川案・伊藤室井案が提出された。これらの点字案は現在、筑波大学附属視覚特別支援学校に現存するものだけで115枚に及ぶ。改良に改良を加え、石川倉次自身が「最良ト考ヘタモノ」と朱筆したものがこの写真である。清音はもち

ろん書く符号も現在と同様。明治23年9月のこと。

<筑波大学附属視覚特別支援学校蔵>

28. 石川倉次の銅像



現在、筑波大学附属視覚特別支援学校に建てられている石川倉次の銅像である。

<筑波大学附属視覚特別支援学校蔵>

29. 点字を考案した頃の石川倉次と同僚や生徒たち



銅像の石川倉次は晩年の頃をモデルにしているが、これは点字を考案した頃の彼とまたその同僚たちである。最後列右から5番目が石川倉次。

<筑波大学附属視覚特別支援学校蔵>

30. フランス製の点字盤



点字を考案したルイ・ブライユはフランス人だからフランス製の点字板が日本にも普及するのが自然であろう。しかし、点字を日本に紹介した目賀田種太郎や手島精一の目にまずうつった英国式点字盤が輸入され、フランス式は普及しなかった。鉄筆が日本製より長いのが特徴。

<筑波大学附属視覚特別支援学校蔵>

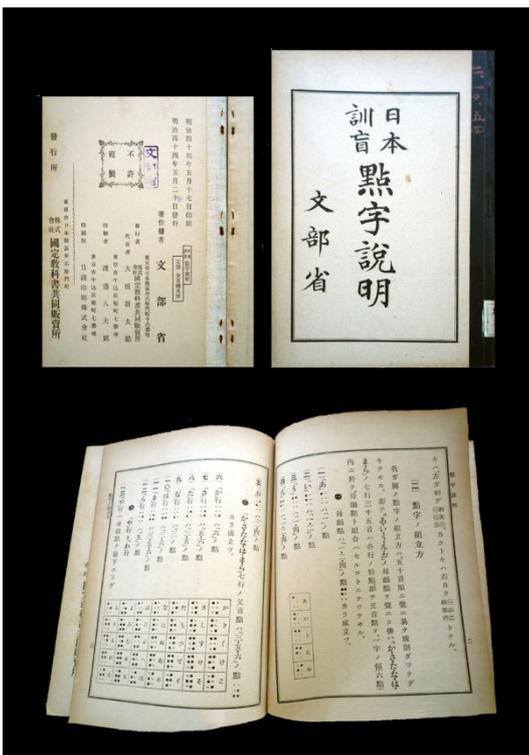
31. 日本製の点字盤（瀧製）



明治25・26年頃、東京盲啞学校生島津貞助が教会で留鋏（とめびょう）製造人瀧録松と会い、たまたま点字盤の話が出た。高価で英国からの取り寄せのため日数がかかるから日本で作る方法はないかともちかけ、瀧製が誕生した。

<筑波大学附属視覚特別支援学校蔵>

32. 文部省による日本訓盲点字説明



明治44年5月20日発行。文部省で著作したもの。明治23年に石川倉次らの手により日本の点字が考案されてから約20年の歳月がたっている。

<筑波大学附属視覚特別支援学校蔵>